

---

**魔法少女リリカルなのは = 冷たい虹色 =**

御神 司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Ⅱ 冷たい虹色Ⅱ

### 【Nコード】

N4312Z

### 【作者名】

御神 司

### 【あらすじ】

転生。二次小説のジャンルに多く取り上げられる、ポピュラーな項目。ある者は私利私欲の為に、ある者は守りたい人の為に、ある者は保身の為に、与えられた力を振るう。これは、そんな転生者達の内の一人、とある少年の物語である。

## プロローグ（前書き）

プロローグにしては長すぎたかな？

## プロローグ

そこは、無名の次元世界だった。年中を通して火山活動が活発であり、所々に溶岩の河が流れており、そこに住む生物達は皆環境に適応し、強固な鎧を身に纏っている。

「ぎゃあッ！」

そこに突如響く、少年の絶叫。空からの落下物による爆音。周りにいた生物達はその音に驚き、ある者は空へ、ある者は溶岩の河に飛び込み逃げていった。

落下したモノは、一人の少年だった。黄金に輝く金髪、中世的な顔立ち、そして赤と蒼のオッドアイ。この世の美しさの代表とも言えよう容姿をした九歳程の少年であった。ただし、その表情は酷く歪んでいた。

頭からは血が流れ、額からは冷や汗が流れ、その顔には恐怖が張り付いていた。更には身に着けているバリアジャケットは所々がポロボロに破れ、手に持つ金色の剣には亀裂が走っていた。

「に、逃げなきゃ・・・逃げなきゃ殺されるッ・・・！！」

少年はゴキブリのように地面を這う。そこにはプライドや誇りなどの言葉は一切ない。ただ逃げて、生き延びたい。生き恥を晒しても逃げ延びたい。典型的な生物の本能だけがあった。

と、少年の目の前の地面に、二本の足が降り立ち、少年の顔はさーっと青ざめていった。

少年が恐る恐る、顔を上げる。目に入ってきたのは、少年よりも二倍ほどの身長がある人型の影。しかし、彼の者を人間と呼べるだろうか。

光を虹色に反射する色を基準としたメカニカルなフォルムをし、それに対して両肩のプロテクターのような物に一つずつある半球状のモノと単眼の瞳は黒真珠のようだ。頭部には丁髷のような突起物がある。生物は彼の者の姿を見れば、本能的に命の危険を察知してしまっ程に農耕、それでいて無機質な殺意がある。美しき殺人マシン、その様な印象を抱かざるを得ない。

感情のこもっていない黒い瞳は真っ直ぐに少年を見つめている。

「ひっ、ひひやあ　　っ!!」

少年は手に持つデバイスを手から放し、彼の者に背を向けると四つんばいの状態でよたよたと逃げようとす。先程までは舐めて掛かっていた相手。しかし、そのような偏見はたったの一瞬で吹き飛ばされてしまった。だから、恐怖に煽られた少年に残された道は『逃げる』という手段しか残っていなかった。

彼の者は、映画の殺人ロボットのように、ゆっくり、ゆっくりと右足から、前に進む。そして、最初の一步で、少年が手放したデバイスを、グシャリ、粉々に踏み砕いた。ゆっくり、ゆっくりと、少年の死のカウントダウンを、一つ、一つ、切ってゆく。

少年は逃げる。彼は今、自分がどれだけ無様な姿を晒しているな

んて分からない。とにかく逃げたい。

彼は二度目の人生を魔法というチカラがあるこの世界に、自らが望んだ美しき姿で、自らが望んだ他者を圧倒する力を得て、手に入れた。気に入らないモノはどんどん潰してきた。自分以外の自分と同じような存在も、そうでない最初からこの世界に存在する者も、何人も葬ってきた。それ程までに少年の力は強力だった。それ故に少年は恐怖という感覚を忘れていった。そして自尊心という感情は異常なまでに肥大していった。自分以外の者は弱い、自分が何時も正しい、自分こそが正義。

だからこそ、敗北した。自分より強い相手と戦ったことが無いという幸運は、今日の不幸までの伏線にすぎないという事に、今更気付いた。

気付けば目の前には溶岩の河。逃げ道は無い。前に進むのが、後ろに下がるのが、どの道待っているのは死であろう。

少年は彼の者に向き、焦りながら右手を出す。

「まっ、待ってくれ降参だ！俺はもう原作介入しない！それに原作キャラやアンタの目の前にはもう近寄らない！それにアンタはまだ生きている！わ、分かるだろ？同じ転生者じゃないか……！」

少年は最後の賭けに出た。命乞い。通る確率はかなり低い大博打。しかし、少年には確証も根拠も無い自信があった。

（俺はオリ主なんだ！きつと主人公補正が効いて、俺はここで助かるんだ！）

少年の異常なまでに膨れ上がっている自尊心は、命が風前の灯になってもなお消える事は無かった。いや、自らの命が消えかかっているからこそ、その妄想は消えることは無かった。

彼の者は歩みを止めた。その時、少年の顔にみるみる色が戻っていく。

と、何を思ったのか、彼の者は右手を広げて自らの左肩の前に移動させる。

次の瞬間、右手の掌から虹色の光線が放たれる。少年は何だと驚くが、考える時間は与えられていない。光が消えると、彼の者の右手にはメカニカルなフォルムの剣が握られていた。剣身では虹色が絶えず流動している。

彼の者はどこからか、表面に『P/C』と描かれたUSBメモリのような物を取り出すと、ソレを剣の接続部に挿入した。

《Prism Maximum Drive》

虹色の剣から、男性の聲が放たれたかと思うと、剣から放たれる光は更に輝きを増し、彼の者はそれを高く振り上げる。

「まままっ待ってくれ！頼む！ここに殺さないでく」

れ、と言い終わる前に、虹色の光は振り下ろされ、少年の右肩から左腰までを、一閃に切り裂いた。

「ぎいぎやあああああああ！！死んだあああああ！！！！  
あああああああ、あ、あ・・・あ？死んで、ない？」

しかし、少年は死んでいなかった。それどころか、切られた筈の場所は何事も無かったかのように無傷だ。

少年が事態に着いていけずに呆けていると、彼の者は最初からいなかったかのように居なくなっていた。

少年は暫く開いた口が塞がらなかったが、正気を取り戻したかのようにハツとする。

「はっ、ははは。ははははは！！やっぱり俺はオリ主なんだ！ここでやられたのもイベントか何かだ！これでパワーアップして、ここそはアイツをぶっ殺すって言う王道的なものなんだ！ははははは！！これであた『俺のハーレム計画』が始められるぜ！はははははははははは！！！！！！！！！！」

少年は笑う。顔を歪めて笑う。死の恐怖が去ったことに対して笑う。命が助かったことに対して笑う。自らが世界の中心だと言わんばかり笑う。

その時、少年の後ろの溶岩の河がザアツと盛り上がったかと思うと、溶岩だけが落ち、その下から岩のような身体をした蜥蜴のような生物が現れた。

少年は音に気付き、後ろに振り向く。

「ハッ！調度良い。『俺のハーレム計画』の再スタートを切る前の糧にしてやる！」

デバイスを機動させようとして、気が付く。少年のインテリジェントデバイス『ガラティン』はすでにいないあの者に壊されてしまっている。

「ツチ、使えねえデバイスだ。まあいい、俺にはまだ『ダイクマター未元物質』が残ってるもんな」

少年は得意げな顔をし、右肩をグリグリと回すと、体勢を取る。

「消し飛びやがれ蜥蜴！」

少年の背後から二枚の白い翼が出現し、それにより回折した溶岩の赤い光が破壊光線に変換し発射され、少年の目の前の無粋な爬虫類を吹き飛ばす。

筈だった。

「……………あ、あれ？」

何も起こらない。

少年の背後から二枚の白い翼が出現し、それにより回折した溶岩の赤い光が破壊光線に変換し発射され、少年の目の前の無粋な爬虫類を吹き飛ばす。

筈だったのだが、何も起こらない。

無粋な爬虫類はグルルウと喉を鳴らしたかと思うと、天に向かって咆哮した。

「ひっ！ちよっ、まっ」

ガブン。と言う音の後に、あたりには無粋な爬虫類の肉を咀嚼する音が響く。

後には、食べ残しと思われる子供の腕が一本、転がっているだけであった。

その腕も、群がってきた小型の肉食動物によって、骨まで食われる運命にあった。

とある街の、高いビルの上。星の輝きを消し去るほどに輝いている夜の街を一望できるほど大きい。その屋上に、一人の少年が立っていた。

若干茶髪交じりの黒髪。眠たそうな瞳。目の下にはクツキリとしたクマ。かなり平凡ではあるが、かなり特徴的でもある、そんな顔の少年だ。

少年の手の中には、一本のUSBメモリのような物が握られている。少年はまじまじとそれを見つめると、何を思ったのか、そのボタンを押す。

《Prism/Commander》

「とても……楽しくなりそうだ……」

その言葉をその場に置き去りにし、少年の姿は消えた。

## プロローグ（後書き）

感想・アドバイス・誤字脱字報告、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4312z/>

---

魔法少女リリカルなのは = 冷たい虹色 =

2011年12月14日22時46分発行